

豊庄だより

福岡市早良区南庄2-26-13
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長 西尾 達

第773号 2023年11月27日

先週の金曜日(11月24日)、朝から大変でした。本村先生が保育園に登園中、サルに出会ったのです。場所は地下鉄室見駅付近(パチンコ屋)。サルと目を合わせてしまい(目を合わせると襲ってくると言われていますが・・・)、構えて見たそうなのですが、すると、サルはきびすを返して、南庄・小田部方面に去っていったそうです。先生が登園後、いきさつを聞き、110番してもらいました。すると、ほどなく警察官が保育園に来られ、先生に事情を聞かれました。そして、「サルは自分より大きな相手には襲ったりしませんよ」と、アドバイスをし、帰られました。この日は、一日中、園児たちは室内で過ごしました。

サルは、昨日(11月23日)は愛宕方面で出没し、次の日は川を渡り早良区へ。園児が園庭にいて、そこにサルが塀を乗り越えて入ってきていたらと思うとぞっとしました。しかし、私たちにできる対策は室内に避難すること、保護者にメール発信をして降園の時、注意をしてもらうよう、お願いする以外方法はありませんでした。

最近、野生の動物が人間の生活圏に入って来るが増えています。北海道・東北では、サルより大きいクマの出没が過去最高の数になっていると報道されています。被害も出ています。西日本でも、鹿、イノシシなどが民家まで山から下りて来て、農作物を荒らしています。私の実家も被害に遭っています。

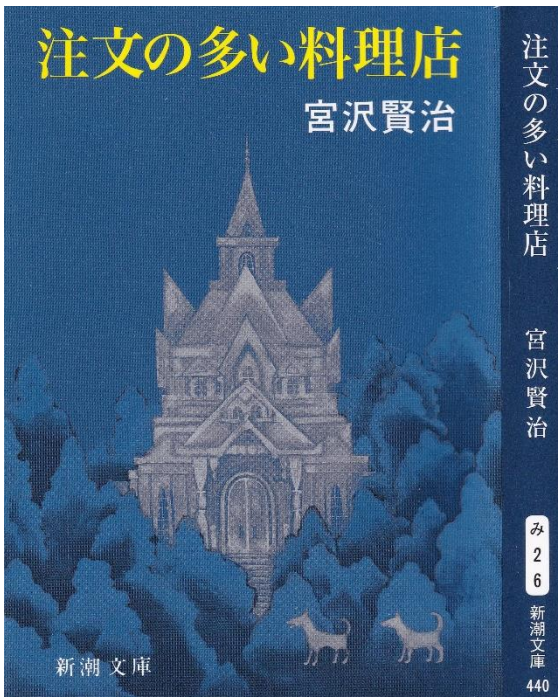
しかし、動物に罪はありません。山の手入れをせずに(過疎化・高齢化の影響)、山の環境を荒らしてしまった人間の責任です。そして、そのことが、動物が人間社会に接近する原因でしょう。

人間とクマのことを題材にした童話に、宮沢賢治の『なめとこ山の熊』(『注文の多い料理店』新潮文庫所収)があります。

この話、「なめとこ山の熊のことならおもしろい」という始まりをします。主人公の淵沢小十郎は、熊を獲ることを生業としていますが、熊の気持ちを読み取ることや意思疎通もできます。

熊は小十郎のことが好きなようで、山の中を小十郎が歩いている時も、熊たちは高いところから見守っていました。小十郎は熊を銃で追って殺した時、「熊、おれはお前が憎くて殺したのではないぞ。おれは仕方なしに猟師をしている。」と話します。その後、こんな逸話が書かれています。ある熊を銃で撃とうととき、熊が2年待ってくれ、その時は、喜んで撃たれると話し、小十郎は了解します。

その後の展開ですが、今回、久しぶりに「なめとこ山の熊」を読み返しました。以前読んだ記憶と結末が違っていたので、「こんな終わり方だったかな」と思いました。興味を持たれた方は、是非読まれてください。



宮沢賢治

Miyazawa Kenji
(1896-1933)

